

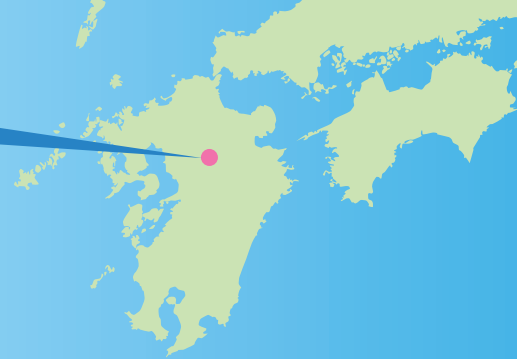
1. 宿泊魅力の向上

- 1 黒川温泉（熊本県）
- 2 杖立温泉（熊本県）
- 3 小野川温泉（山形県）
- 4 有馬温泉（兵庫県）
- 5 大阪市（大阪府）
- 6 小樽雪あかりの路（北海道）
- 7 勝浦朝市（千葉県）
- 8 さんさん館（宮城県）



黒川温泉

【くろかわおんせん】



- 温泉全体の統一したイメージ作りによって、そぞろ歩きを楽しめる環境を整備
- 露天風呂めぐりにより新たなファンを獲得



黒川温泉街を流れる田の原川 撮影：能津 和雄

取組概要

旅館経営者等による、環境・景観・おもてなしの向上の一体的な取組

温泉地としての景観保持と環境保護への取組を行うことによって「そぞろ歩き」を楽しめる環境を整備してきた。具体的には地域内で植樹を行ったり、看板のデザインを統一するなど、「黒川温泉」全体としての統一したイメージ作りを展開してきた。さらに宿泊客のみならず日帰り客も対象にした露天風呂めぐりのアイデアにより、黒川温泉の新たなファンを獲得している。

これまでの経緯

- 昭和61年 旅館組合を中心に植樹を開始。
各旅館が露天風呂を設置し、来訪客がそれを周ることができるシステムを導入、宿泊した宿だけでなく他の宿の露天風呂も楽しめるようにした。
- 昭和62年 統一した看板の設置を開始。
- 平成5年 筑後川の源流域に位置することから、美しい川を守るために環境にやさしい石けんやシャンプー等を各旅館で使用。
- 平成12年 まちづくり協定締結。周辺の景観に統一感を持たせ、高さ制限や色にも配慮。



統計データ

○宿泊者数	平成17年	328千人	平成18年	340千人	平成19年	325千人
○宿泊定員稼働率	平成17年	45.8%	平成18年	47.5%	平成19年	45.4%
○入湯手形販売枚数	平成17年	13.6万枚	平成18年	15.0万枚	平成19年	14.2万枚

地域づくりのノウハウ

(露天風呂めぐりと入湯手形の導入)

課題 各旅館において露天風呂を設置することとなったが、立地条件の都合によりどうしても設置できない旅館が出てしまい、黒川温泉の統一した特色を持つことに障害となってしまった。

解決策 この件についての不公平感を解消するため、露天風呂のない旅館での宿泊客も楽しめるよう、各旅館が露天風呂を宿泊者以外にも開放し、有料で入浴できるようにした。さらに、半年間で3回利用できる入湯手形を導入し、割安感を持たせている。

入湯手形が一般に知られるようになると、訪問客が大幅に増加した。この手形は地元の間伐材を使用しており、老人会に委託して製作しているほか、収益金を植樹等に還元して環境整備に努めている。



お問い合わせ

黒川温泉観光旅館協同組合

TEL : 0967-44-0076

URL : <http://www.kurokawaonsen.or.jp/>

杖立温泉

【つえたておんせん】



- 昭和レトロなまち並み、路地を活かした温泉街のまち歩きを実施
- 起伏に富み階段が多い、観光客向けの店が少ない等の不利な点を工夫して克服



杖立温泉街の路地裏「背戸屋」

取組概要

観光区域と生活空間が混在する独特の飾らない魅力を紹介し、程よい感覚の路地裏の空間づくりを展開

昭和レトロな町並み、独特といわれる起伏に富んだ曲りくねった路地を利用したまち歩きを実施。階段が多いため、杖と杖の置き場を設置。また、“ギャラリー背戸屋”と題して路地裏の壁や石垣に額縁を取り付け、お気軽アート、昔懐かしの写真展を開催し、季節により展示物を替えている。

また、杖立温泉特有の有毒ガスを含まない90度を超える温泉（蒸気）を利用した温泉蒸し玉子作りが好評。簡単な調理だが、杖立温泉の昔からの地元住民の文化を少しでも知っていただく良い機会になっている。また、これを体験してもらうことにより杖立プリン（昔は甘玉子とよばれていた）が杖立温泉の地元グルメになっている理由が良く理解していただけている。

これまでの経緯

- 平成10年8月 前身であるワークショップチーム設立
- 平成11年11月 背戸屋まつりスタート（以後毎年11月に開催）
- 平成12年 路地裏を重点においたイベント、景観整備を行うチーム背戸屋（せどや）スタート
- 平成18年6月 ぎゃらりー背戸屋プロジェクト（路地裏アート）
- // 11月 「杖立のしるしは ぼくらのしるし」杖立温泉ロゴマーク決定
以後、統一的な使用開始、ロゴ使用の商品開発
- 平成19年3月 案内人の育成、研修
- // 4月 まち歩きの基本コースの設定
- // 4月～ まち歩きを実施。同時に杖立プリンを案内中に試食、体験。
- ・杖立温泉街のまち歩きは1周が約1時間半のコースが通常となっており、スタート時点で玉子を共同の蒸し場に入れ、ゴールと同時に蒸しあがるように設定。ゴール近くの足湯に入りながら食していただく。
- ・杖立温泉特有の資源である有毒ガスを含まない温泉(蒸気)を活用することで、杖立温泉の地域性・独自性をアピール。



統計データ

- 案内総数 平成19年度まち歩き参加人数 約 800人
平成20年度まち歩き参加人数 約1,200人
(他、地域の子供たちや地域づくりの団体には無料で案内をしているので実質案内総数は2年間で3,000人近くになる)

地域づくりのノウハウ

課題 杖立温泉の案内スタイルの模索と人材育成

解決策 よりたくさんの方の地域のボランティアガイドとの交流、及び案内の研修。あくまでも杖立独自の案内スタイルの方針を一致させることを目標にした。

課題 お土産店、昼食（ランチ）の店、若者が好みそうな小物の店等があまりにも少なく様々な観光客の要望に応えることがむずかしい。

解決策 杖立プリンを旅館、おみやげ屋を交え、協力して開発。開発に携った19件の旅館、おみやげ屋等で30種類のプリンが気軽に食べられるようにした。案内に盛り込むことで評価を得ている。また、杖立温泉のロゴマークを使った日本手ぬぐいやタオルを製作、販売。同ロゴマークや杖立色（朱赤）をできるだけ使用することにより統一感を出す努力をしている。

課題 小さい地域の出来る事業展開の限界

解決策 事業の多角化を目指すより、地域の他のグループ等と連携しながら、竹明かりを使用したイベントや、共同の蒸し場の更なる活用、杖立温泉のオリジナル商品の開発（Tシャツ、アパレルグッズ等）が行われている。小さい地域の特性を生かすことでより独自性の高い杖立スタイルを定着させている。



お問い合わせ

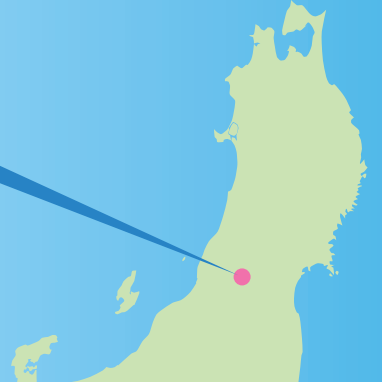
杖立温泉観光協会

TEL : 0967-48-0206

URL : <http://tsuetate-onsen.com>

小野川温泉

【おのがわおんせん】



- 地元密着型温泉地から県外宿泊客の増加のための温泉街の総合的な魅力づくりへの取組



雪化粧した小野川温泉の街並み

取組概要

お楽しみソフトプランや景観整備で小野川温泉のまち歩きの楽しみを高める

小野小町開湯の1200年の歴史がある温泉で、地元客が7～8割の地元密着型温泉地だが、バブル崩壊後、宿泊客は半減した。大手旅行会社等による「湯浴み旅情」商品造成を契機とし、地元客だけでなく、県外の宿泊客の増加に取組む中、小規模な旅館が多く、コンパクトな温泉街を形成している小野川温泉で、お客さんが旅館から出て、まち中全体を楽しんでいただくため、「まち中歩き」を実施することにより、顧客満足度を高め、リピーターの創出を目指した。

このため、共同露天風呂、足湯、案内所などを整備したが、あわせてソフトプランとしての湯めぐり（共通入浴券）や温泉情緒ある空間づくりに向けた景観修復など、楽しめる魅力ある温泉街づくりのための取組を行っている。

これまでの経緯

- 平成14年 JR東日本&JTBの「湯浴み旅情」の商品造成に合わせ、「小野川お楽しみプラン」を作成したことにより、首都圏客及びまち中歩きが増加。
- 平成15・16年 共同露天風呂・足湯・案内所の設置により、まち中歩きが充実し、地元民とのふれあいの機会が増加。
- 平成17・18年 「小野川温泉ビジョン策定委員会」が基本プラン策定し、景観形成指針ができ、景観修復を開始したところ、温泉情緒ある空間づくりの機運が増し、ファサードの整備が少しずつ始まった。



統計データ

○宿泊者数

平成3年…210千人 平成14年…110千人 平成16年…120千人 平成19年…100千人

地域づくりのノウハウ

(小野川お楽しみプラン作成時)

課題 「湯浴み旅情」商品提携旅館とその他旅館の取組に意欲の差が生じた。

解決策 お楽しみプランを特定の商品のプランとするのではなく、すべてのお客さんのプランとして位置づけ、全ての旅館で取組むこととし、お金を掛けなく、今あるモノを知恵で活かそうとの方針がアイデアを生んだ。

(小野川ビジョン策定時)

課題 お楽しみプランでお客さんがまち中歩きしても、温泉情緒がないとの意見があり、計画づくりが求められていた。

解決策 観光関係者だけでなく、一般住民や外部者も参加し、小野川を客観的に捉えた計画が生まれ、まちづくりの方針が共有化された。

意見交換の中、小野川の景観形成や温泉情緒の大切さが共通の意識となり、先行事業として、景観修復が始まった。

課題 今後、まち中歩きの楽しいプランづくりとともに、美しい温泉街の景観修復作業が求められる。

解決策 会津・米沢観光圏の認定を受け、新たなる体験プランや環境整備事業の実施により、小野川温泉の魅力づくりを実現する。



お問い合わせ

小野川温泉観光協会

TEL : 0238-32-2740

URL : <http://www.chuokai-yamagata.or.jp/onogawa/>

泊食分離による新たな宿泊形態の創出

有馬温泉 【ありまおんせん】

- 泊食分離への取組の草分け的存在
- 温泉街に宿泊客が出歩くことで街の賑わいの創生をねらう



有馬温泉街と有馬川

取組概要

顧客ニーズが多様化する現在において、有馬温泉で新たな宿泊形態を提供

旅行の形態が団体旅行から個人旅行にシフトしている現在において、今までの1泊2食付という温泉旅館お決まりの設定だけでは、多様化している顧客のニーズに対応できない。そして、宿では宿泊のみとし、提供者側が決める料理ではなく、自分の好きな時間に好きな食べ物を自由に選択できるという新たな宿泊形態に取組んだ。

具体的には、泊食分離実証実験事業を実施（2年間）した上で、素泊まり専用の宿「小宿とうじ」を運営するとともに、その他、これに必要不可欠な「まちの賑わい創出事業」に取組んでいる。

これにより、温泉街に宿泊客が出歩くことで街の賑わいが創生されるとともに、温泉街の物産店、飲食店等の客も増えることで、温泉街全体が活性化されていく。

これまでの経緯

日本最古の名湯と名高い有馬温泉のお湯をゆっくり味わってみたい。

それには旅館の食事ではなく、有馬の飲食店で食事してもらい、色々な有馬を味わって頂きたいと思い、それまで神戸市が使っていた施設を有馬温泉旅館協同組合が借り受け、飲食店組合や物産組合をはじめとする有馬温泉観光協会が協力して、小宿とうじを始めた。

小宿とうじの運営は、神戸市が所有する有馬温泉観光交流センター（有馬の工房）の3階部分の使用許可を受け、簡易宿泊施設として運営するとともに、まち歩きの仕事掛けや宿泊者を増やすための朝・夕の継続的なイベント（涼風川座敷、門前市など）や有馬米プロジェクトを開催し、有馬温泉ならではの名物づくりに取り組んでいる。

また、食の魅力の向上の一環として、「有馬美食倶楽部」を立ち上げ、地産地消と食の安全をテーマに、産地と直接契約するシステムを構築し、他地域と連携を図っている。

平成15年～平成21年 泊食分離の実証実験事業の実施

平成15年

素泊まり専用の宿「小宿とうじ」を有馬温泉旅館協同組合が運営。

トイレは共同。内湯はないが、ツインに2人で泊まって平日なら9千円。外湯が無料の特典有り。

平成19年7月

有馬涼風川座敷開始

有馬川親水広場において、芸妓さんの舞い踊りや、ステージイベントなど開催。

平成20年10月

有馬美食倶楽部では、新鮮な松葉カニを確実にご提供するため平成20年10月21日、有馬温泉観光協会と浜坂漁港は松葉カニの売買契約を締結。

11月6日解禁以降、有馬にある約30の旅館と飲食店で松葉カニを使った料理メニューを用意出来るようになった。日本海まで行かなくても、産地と同じ新鮮なカニ料理が楽しめる。

平成21年3月

「有馬温泉88(米)プロジェクト」開始。



統計データ

○小宿とうじ宿泊者数	平成17年	1,986人	平成18年	2,366人	平成19年	2,351人
○小宿とうじ稼働率	平成17年	34.8%	平成18年	45.3%	平成19年	46.0%

地域づくりのノウハウ

課題 如何にして有馬温泉全体での取組となるよう、体系を構築するか？

解決策 小宿とうじは有馬温泉旅館協同組合が主導して、飲食店組合や物産組合をはじめとする有馬温泉観光協会が協力する形により、いわば公的機関が連携して実施する体制とした。

課題 泊食分離事業を展開するには飲食店が少ない。

解決策 神戸ルミナリエの期間中、有馬～三宮間を往復する無料バスを運行。飲食店が多い神戸市街地を結ぶバスの運行で泊食分離事業を推進している。



お問い合わせ

有馬温泉観光総合案内所

TEL : 078-904-0708

URL : <http://www.arima-onsen.com/>

大阪市

【おおさかし】

- 都市の利点を生かし、伝統芸能・文化を活用したナイトライフメニューの充実により、宿泊の魅力を向上



レトロ建築でのナイトコンサート（大阪倶楽部）

■ 取組概要

夜の魅力=ナイトアミューズメント

大阪が誇る上方伝統芸能を活用した、新たな夜型エンターテインメントとして、落語家の解説付きで4種類の伝統芸能をダイジェストで上演する。また、参加者が体験する「初心者のための上方伝統芸能ナイト」や大阪市が「大大阪」と呼ばれた時代に数多く建設され、今も残るレトロ建築で、食事やナイトコンサート等を楽しめる「大大阪レトロナイト」等を開催し、観光客等に夜の大阪の魅力を気軽に楽しんでいただく機会を提供している。

これまでの経緯

大阪市の夜型観光については、大阪商工会議所が主催する「大阪ナイトカルチャー事業」（大阪で住み・働く人々や国内外からのビジターが豊かで楽しく、安全かつ文化的なナイトライフを過ごすことができる都市・大阪を目指すとともに、新たな夜型市場の開拓や消費拡大を図ることを目的とした事業）と連携し、観光客を中心に大阪の夜の魅力を気軽に楽しめる機会を提供する、夜の観光メニュー開発を推進している。

平成15年10月 大阪商工会議所の「大阪ナイトカルチャー事業」がスタート

平成19年4月 「大阪ナイトカルチャー事業」と連携し、ナイト事業をスタート

- ・「初心者のための上方伝統芸能ナイト」を企画・支援
- ・博物館や美術館の夜間開館とイベント事業の支援

11月 近代建築を活用した「大大阪レトロナイト」シリーズをスタート

- ・食事とともにコンサートや館内見学が楽しめる新たな夜型観光メニュー

平成20年4月 「初心者のための上方伝統芸能ナイト」が能楽堂主催により毎月第1、第3土曜日に定期公演を開始



統計データ

○宿泊者数	平成17年	10,430千人	平成18年	11,740千人	平成19年	12,030千人
○宿泊稼働率	平成17年	77.4%	平成18年	76.8%	平成19年	75.6%
○経済効果	平成17年	20,423億円	平成18年	22,075億円	平成19年	22,742億円

地域づくりのノウハウ

課題 効果的な事業の展開

解決策 大阪商工会議所と共同で「初心者のための上方伝統芸能ナイト」「大大阪レトロナイト」など様々なナイトアミューズメント事業を造成し、ナイトカルチャー事業として位置づけている。

課題 継続的な実施のための体制づくり

解決策 大阪の夜の観光魅力向上を目的として、事業者へ働きかけることで多くの協賛事業が民間主導で実施されており、それらと連携した観光メニュー開発、広報活動などを行っている。



お問い合わせ

大阪市ゆとりみどり振興局集客観光課
大阪商工会議所

TEL: 06-6615-0696

TEL: 06-6944-6362

URL: <http://www.city.osaka.lg.jp/>

URL: <http://www.osaka.cci.or.jp/>

小樽雪あかりの路

【おたるゆきあかりのみち】



- 閑散期に地域資源を活用した宿泊型観光を目指したイベントを官民一体となって企画、地域住民に愛されるイベントに成長



運河会場を幻想的に照らす「スノーキャンドル」

取組概要

『小樽の夕べが無数の温かなあかりに包まれる』『おもてなしの心』と「人と人の心のつながり」を大切に

夏は観光客でにぎわう小樽も、冬は雪の音が聴こえそうなほどひっそりと静まりかえる。人々も心をとどしがちになる、この「冬」を逆手にとって、歴史的建造物等を数多く有する街並みや景観を有効活用した新しいイベントが開催できないか、通過型観光から宿泊型観光にしていくにはどういった方策があるのか、こんな発想から官民一体となった議論の末、心あたたまるイベント「小樽雪あかりの路」が11年前にスタートした。運河、旧手宮線という北の歴史の最重要スポットを会場に、今では市街中心部をはじめ小樽全域に広がりを見せ、約15万本のろうそくと、運河の水面に浮かべた400個の浮き玉キャンドルや散策路に設置されたスノーキャンドル・オブジェなどの温かな「あかり」が小樽を訪れる人々を魅了し、北海道の冬の風物詩までに成長している。イベント名は小樽ゆかりの作家伊藤整の詩集「雪明りの路」（大正15年出版）に由来。

これまでの経緯

- 平成10年11月に市民らで構成される小樽観光誘致促進協議会が実行委員会を立ち上げ、平成11年2月に第1回小樽雪あかりの路が11日間にわたり開催される。
- 『小樽雪あかりの路2000年カウントダウン』と銘打ち、平成11年12月31日から平成12年1月1日にかけて小樽運河に2,000本のキャンドルを灯すなど、開催期間中以外にもイベントを実施し、雪あかりの路をPR。
平成12年2月～ コンサートを企画、来場者が気軽に体験出来る参加型のイベントなども企画し、好評を得ている。
- 平成16年11月 国土交通省より「手づくり郷土賞」（地域活動部門）を受賞。
- 平成18年3月 「第10回ふるさとイベント大賞」において、道内イベントで初となる大賞（総務大臣表彰）を受賞。
- 平成19年1月 「第2回JTB交流文化賞」において、歴史的遺産を活用したまちづくりとして最優秀賞を受賞。



スノーキャンドル広場（旧国鉄手宮線跡地）



オブジェ制作風景

統計データ

- 期間中の来訪者数
平成16年 457千人 平成17年 463千人 平成18年 505千人 平成19年 568千人 平成20年 575千人
- ボランティア参加者数
平成16年 950人 平成17年 1,500人 平成18年 1,640人 平成19年 1,800人 平成20年 2,551人
- 海外ボランティア参加者数
平成16年 29人（韓国） 平成17年 40人（韓国） 平成18年 55人（韓国43人、台湾2人、オーストラリア10人）
平成19年 42人（韓国42人） 平成20年 57人（韓国51人、中国6人）
- 外国人宿泊者延数（小樽市年間）
平成13年 14,225人 平成14年 20,101人 平成15年 25,501人 平成16年 35,024人 平成17年 40,286人
平成18年 43,110人 平成19年 44,526人

地域づくりのノウハウ

課題 会場運営費用や人的経費をどのように工面するか。
解決策 地元企業や商店街有志の協賛金による支援と、市民ボランティアスタッフによるスノーキャンドルとオブジェの製作からろうそくの点火・消火及び回収に至る手作業により、人的経費の解消と市民全体の取組に繋がった。

課題 景気の動向により協賛金の獲得が厳しくなり、運営資金の確保をどのようにするか。

解決策 フォトコンテスト入賞作品のポストカードや、スノーキャンドル用のろうそくなど市内各所に販売店を設け、予算確保の一環として工夫している。また、イベント開始から10年連続黒字決算となっている。

課題 イベントの普及に向けて住民からの協力や理解をどのように得るか。

解決策 町会や幼稚園、保育所、小中学校などに積極的に参加を呼びかけるとともに、実行委員が雪とろうそくを使ったスノーキャンドルやオブジェの製作に向いた。町会や学校単位などでの雪あかりの路への参加は、地域コミュニティの醸成に

も貢献している。

課題 リピーターの確保に向けたマンネリ化の打開と、市民にも愛着のあるイベントに成長させるにはどのようにするか。

解決策 コンサートなどの音楽イベントや、来場者参加型の各種イベント、韓国屋台などを企画・実行し、何回来て楽しめる雪あかりの路を目指した。また会場のオブジェ製作を市民公募し、雪あかりのコンセプトを基に作品に統一感を持たせるよう注意事項を徹底し、かつオリジナリティのある様々なオブジェ群が来客から好評を得た。評価は製作者にとっての励みにもなるため、毎年オブジェづくりを楽しむ市民も多くなっている。

課題 外国人観光客の効果的な誘致。

解決策 小樽商科大学の留学生の協力を発端に、主に韓国などから毎年50人程度の海外ボランティアが訪れている。参加者の口コミやインターネットにより雪あかりの路の素晴らしさが広がり、海外からの観光客が増加する要因となった。

お問い合わせ

小樽雪あかりの路実行委員会事務局
(小樽市産業港湾部観光振興室)

TEL : 0134-32-4111

URL : <http://www.yukiakarinomichi.org/>

勝浦朝市

【かつうらあさいち】

- 歴史と伝統に支えられた朝市による観光客の集客
- 商店街との連携による地域活性化



多くの観光客で賑わう勝浦朝市

取組概要

市民の台所として発展し、受け継がれてきた朝市への集客と地域活性化

永い歴史と伝統に支えられた勝浦朝市を開催することで、市内産業の振興を図ると共に朝市としての秩序とその品位を保ちつつ生産者が消費者に新鮮で廉価な生産物を広く提供し、消費者、生産者及び商業者の相互信頼の確保と地域住民の交流を図る。また、近年はテレビや雑誌などマスコミに取り上げられ朝市を訪れる観光客が増えていることから商店街と連携を取り地域の活性化を図る。

平成21年7月より朝市に案内人2名を配置し朝市内の案内及び観光地等の説明を行い朝市のイメージアップを図る。

毎年2月第3土曜～3月3日に行うイベント「かつうらビッグひな祭り」開催期間中、朝市内で甘酒を振る舞い集客を図っている。

これまでの経緯

- ・天正19年(1591) 勝浦城主 植村土佐守泰忠が農産物と海産物の交換を行う場として市を開いた
- ・開催場所の勝浦区が中心となり勝浦朝市実施要綱に基づいて朝市運営委員会が運営。原則、水曜日を除く毎日、6時から11時半まで開催している。
- 昭和62年11月～ 朝市の発展を考え現在の場所（月の前半が下本町・月の後半が仲本町）で開催
- 平成7年10月 朝市の活性化と情報交換を目的に朝市サミットに参加
- 平成8年11月 勝浦市において朝市サミット開催
- 平成11年1月 勝浦朝市の振興及び会員相互の親交を図るため勝浦朝市しんこう会を設立し、商店街と協力し「勝浦市商業振興会」を結成し、共同でチラシの作成等を行ったが1年で休止状態
- 平成15年 勝浦中央商店会を設立
- 平成18年 勝浦中央商店会による「街の駅かつうら楽座」の開設及び「かつうら楽市」を開催
- 平成22年 勝浦市において朝市サミット開催予定



統計データ

- 観光入込客数 平成17年1,530千人 平成18年1,540千人 平成19年1,610千人
- 朝市入込客数 平成17年 350千人 平成18年 360千人 平成19年 380千人
- 宿泊者数 平成17年 310千人 平成18年 310千人 平成19年 310千人
- 出店者数 平成19年 70店

地域づくりのノウハウ

課題 朝市の体制づくり

解決策 朝市の開催場所である勝浦区の役員による勝浦朝市運営委員会と出店者で構成する勝浦朝市しんこう会の二つの組織があり連携して朝市の振興を図っている。

課題 朝市の出店者の高齢化及び後継者不足

解決策 勝浦市、商工会及び朝市が一体となって今後の朝市について検討を行っている。

課題 観光客の誘致

解決策 テレビや雑誌等の取材に積極的に応じて朝市のPRを図った。

課題 朝市の施設の整備

解決策 今現在、補助金を活用した朝市の休憩所（トイレ）を計画中である。

課題 全国朝市サミットの開催（平成22年）

解決策 勝浦市、商工会、観光協会及び朝市関係者により実行委員会を立ち上げ検討する。



お問い合わせ

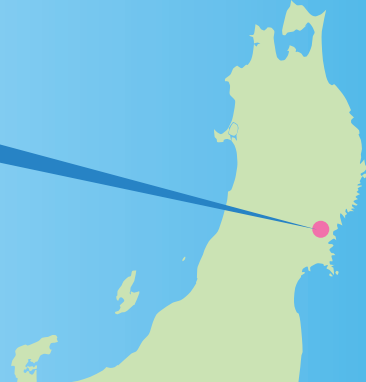
勝浦市観光商工課

TEL：0470-73-6641

URL：http://www.city.katsuura.chiba.jp/

さんさん館

【さんさんかん】



- 廃校となった校舎を宿泊施設兼グリーンツーリズム活動拠点として再生
- 民営による廃校校舎利用宿泊施設として全国初の取組



廃校を利用した宿泊施設「さんさん館」

取組概要

懐かしい木造校舎、人の温もりとあふれる自然。ここには子ども達に残したい故郷がある。

平成11年3月31日、南三陸町入谷地区の山里にひっそりと佇む林際小学校は児童減少のための統合などから廃校になり、127年もの歴史を刻んだ築47年の木造校舎は、町の方針で解体される予定だった。

林際小学校学区では、運動会、学芸会などの学校行事に、父兄はもちろんのこと、地域を挙げて参加し、活動を楽しみ熱心に応援していたので、学校を通じて地域はひとつに結ばれていた。地域にとって心の拠り所のような学校が無くなるのは忍びない。そんな思いを抱いた地元の卒業生12名が校舎を地域に根ざした活動の拠点に再生しようと立ち上がった。

平成11年、地域活動のスタートとして立ち上がった卒業生12名が、旧林際小学校運営事業組合を組織。平成12年度には、町協力のもと「山村振興等農林漁業特別対策事業」に採択され、グリーンツーリズムを通して心地よく滞在できる宿泊空間にリニューアルした（総事業費 36,117千円）。地域の三つの山に囲まれ、いつも日差しが差し込む温もりある里を守りたいという思いから「さんさん館」と命名し、平成13年4月1日にオープンした。

これまでの経緯

【立ち上げまでの経緯】

- 平成11年12月 旧林際小学校事業運営組合準備委員会設立
- 平成12年3月 町に事業協力について陳情
 - 4月 旧林際小学校事業運営組合設立総会
 - 6月 町有財産無償譲渡申請（建物）・町有財産無償借受申請（土地）
 - 10月 改修工事発注
- 平成13年2月 旅館業法、食品衛生法許可取得
 - 3月 開業記念式典（25日）
 - 4月 さんさん館オープン
- 平成16年4月 事業改善計画策定。ブームの一時衰退などにより、年々減少の傾向にあるため、独自の商品開発や情報の発信等の取組に着手

（参考）

【さんさん館の位置づけ】

独立した宿泊施設であることもさることながら、立ち上げの背景が物語るように、地域活動の拠点としての役割も大きい。

学校の周辺では、目の前の清流にホタルが舞い、長閑な牧草地には放牧された牛、季節ごとに里を彩る田んぼ、実りの秋に収穫を迎えるりんご畑が広がる。この里山の資源を活用したグリーンツーリズムにより、最終的には地域資源を活用した人材の起用、産物の流通を展開させ「人と地域の豊かさ」に繋げることを目指している。



統計データ

○宿泊者数

平成13年度 2,800人 平成14年度 2,100人 平成15年度 2,000人
平成16年度 1,600人 平成17年度 1,300人 平成18年度 1,500人

地域づくりのノウハウ

課題 民営による事業運営はリスクが大きく、当初行政側は慎重な取組を促した。

解決策 廃校を利用した民営による宿泊施設としては全国で初めての取組であったことで、メディアを活用して効果的に情報発信できたことが集客に繋がった。

課題 グリーンツーリズムの体験メニューづくりの工夫

解決策 体験活動の受入（講師）はすべて地域の農家・漁家であり、地域のコミュニティの強さをそのまま商品としている。従って、体験のために特別大きな投資を要せずに充実した体験ができる。

課題 食事の魅力作りの工夫

解決策 養蚕が盛んであった歴史から、それにちなんだ籠を用

いたお膳に、地元の畑で取れた安心な季節野菜と、地元の海で獲れた魚介を食材として、地域の季節料理をメニューとしている。

課題 地域の資源を活かす工夫

解決策 周辺の里山をハイキングしながらバードウォッチング、川ではイワナのつかみ取り体験をして炭火で焼いて食す。金を産出した里のいたるところに残る物語を訪ねて地域を巡る。

課題 利用者数が年々減少傾向にある

解決策 パンフレット内容の充実を図る、ITや情報誌（広告および記事）の活用、エージェント事業への情報提供、町観光事業との連携等を実施している。

お問い合わせ

旧林際小学校事業運営組合

TEL：0226-46-5051

URL：http://www5.ocn.ne.jp/~san3kan/

1. 宿泊魅力の向上(参考編)



1 阿寒湖温泉 【あかんこおんせん】

■NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構
TEL.0154-67-3200 URL <http://www.lake-akan.com/>



地域のスクラムで「阿寒湖温泉ならではのおもてなし」を実現!

阿寒湖温泉のアイヌブランド化推進の一環として「千本タイマツ」を企画。
NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構が阿寒アイヌ工芸協同組合をはじめ、旅館組合、商店街などと地域が一体となった実施体制を構築し、半年に亘るロングラン開催を実現。
お客様の満足度向上とともに、温泉街の街歩きを楽しむキッカケづくりとして地域全体での経済活性化を図った。

2 登別温泉 【のぼりべつおんせん】

■社団法人登別観光協会
TEL.0143-84-3311 URL <http://www.noboribetsu-spa.jp/nobo/>



鬼火の路

毎年春から秋にかけて、地獄谷の遊歩道にフットライトを整備して夜間の散策を楽しんでいた。観光客の誘致促進と宿泊滞在客に外に出てもらうことを目的として平成18年から実施。なお、国立公園内で生態系に影響するような取組は行わないため、ライトアップという言葉は使用しない。また、地獄谷では、6～8月に鬼花火という手筒花火の打ち上げイベントも実施。

3 ゆのたに温泉郷 【ゆのたにおんせんきょう】

■湯之谷交流センター ユピオ
TEL.025-795-2638



職種を越えた協力体制で「住みたい街」、「訪れたい街」をつくり人情あふれる温泉街を目指す

縁めぐり券の発行、大湯温泉地内の景観整備、縁めぐり看板の制作などの取組を通じて温泉地内で営業している宿泊施設や飲食店などの人たちの相互理解と協力体制をつくる。さらには地区居住の観光客に携わらない人たちにも関心をもってもらう。

職種を越えて観光に携わる人と一般住民が心一つにし「住みたい街」、「訪れたい街」をつくり、訪問客にとって人情あふれる温泉地を目指す。大湯温泉地内の景観づくりもワークショップを中心に塀の設置などで心とむむ景観を作り上げていく。

4 有馬温泉 【ありまおんせん】

■有馬温泉観光総合案内所
TEL.078-904-0708 URL <http://www.arima-onsen.com/>



外国人もそぞろ歩きのできる温泉街

有馬温泉では、これまで様々な時期に様々な目的で案内サインが設置されてきており、それらは、デザイン、表示内容についての統一性に欠けていた。そのため、平成18年度にこれらサインの整合性を図るとともに、外国人旅行者を含むすべての旅行者に対して、目的地へのアクセスをより分かり易くするため、地区内主要細街路の交差点に案内サインを設置し、回遊性の向上を図った。

特に、金の湯・銀の湯といった外湯や資料館など公的な建物については、回遊性を高める目印となるため、多くのサインに掲載している。

5 皆生温泉 【かいけおんせん】

■皆生温泉旅館組合（素鳳ふるさと館）
TEL.0859-34-2888 URL <http://www.kaike-onsen.com/>



長寿・健康・美肌の塩湯 皆生温泉「得得」湯めぐり

平成12年に皆生温泉開湯100周年を迎え、記念事業の一環としてお風呂めぐりが出来るチケットを限定発売し、大反響だった。その後、全国的な湯めぐりブームから本格的な湯めぐりシステムの構築を平成14年から実施。

また、「米子市観光センター」内の展示場を利用して「素鳳ふるさと館」を開設し、山陰歴史館貯蔵の貴重な雛人形の展示に合わせ創意工夫された併設展を行ない、来訪者が文化的展示物に触れあうことで満足度を高め、皆生温泉に対する好印象を深めることを目的とするため設置。

更に、温泉街を気軽に安心して散策できるよう旅館組合が中心となってパトロールを実施。

6 原鶴温泉 【はらづるおんせん】

■原鶴温泉旅館協同組合

TEL.0946-62-0001 URL <http://harazuru.jp/index.html>

W美肌の湯のPR

平成20年より地域おこしのため、原鶴の泉質のよさ「W美肌の湯」（アルカリ成分・硫黄成分）の美肌効果のPR、原鶴温泉のイメージキャラクター「つる姫ちゃん」を誕生させ、県内各所で出前足湯を行った。また、着地型体験として椎茸狩り体験や座禅体験、もちつき体験など近隣の方の協力を得て取組み、街並み整備として、筑後川河川敷きの除草作業、ゴミ拾いを毎月行い、国道386号から原鶴温泉入口の看板の付け替え、植栽、ガードレールの塗装など観光地としてお客様に喜ばれるように足元からきれいにしようと地道に取り組んでいる。

泊食分離による新たな宿泊形態の創出 北海道富良野市、美瑛町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠村

7 富良野・美瑛広域観光圏 【ふらの・びえいこういきかんこうけん】

■社団法人ふらの観光協会

TEL.0167-22-5777 FAX.0167-23-5014 URL <http://www.furano.ne.jp/kankou/>

市街地とホテル・ペンション街を結ぶシャトルバスで泊食分離

飲食店、市街地への移動やイベント会場へのアクセスを改善し、更なる誘客を図る。スキー場・温泉施設・夜間などの観光ニーズにあわせたシャトルバスの運行。

背景：長期滞在宿泊者（特に外国人）については宿泊施設にて提供される食事にマンネリ感（メニューに変化が無い等）や趣向にあったレストラン、バー等をチョイスしたいという要望がかねてからあり、移動手段がない等の意見があった。

目的：宿泊と食事を分離することにより、好みの食事スタイルが選択出来る。また、地元住民との交流の場が持てることにより「ふらの」がより好印象となり更なるリピーターの獲得となることを目的。

泊食分離による新たな宿泊形態の創出

北海道留萌市

8 留萌市 【るもいし】

■NPO法人留萌観光協会

TEL.0164-43-6817 URL <http://www7.ocn.ne.jp/rukankou/>

留萌宿泊満足度向上事業「留萌四季の晩ご飯」

留萌は甘エビ、ヒラメ、ウニなど海の食材の宝庫であり、水産加工品も豊富なことから、旬の味覚で観光客の満足度を高め、留萌のファンを増やすことで、滞在型の観光へ転換を図ることを目的とした「四季の晩ご飯」を実施。

留萌市内の旅館、ホテルでは宿泊者に食の情報を提供するほか、宿泊した際に配布するパスポート（証明書）を飲食店（加盟14店）で提示することで、留萌の味を堪能できる特別メニュー（四季の晩ご飯）を提供。飲食店と旅館、ホテルとの連携を図ることにより、観光客への対応が充実され、サービスアップに繋がった。

泊食分離による新たな宿泊形態の創出

長崎県平戸市

9 平戸市 【ひらどし】

■社団法人平戸観光協会

TEL.0950-22-4111 URL <http://www.hirado-net.com/>

泊まってお得、使ってお得な平戸満喫クーポン「自由に食べてよかプラン！」

平戸市内の複数の宿泊施設の参加により、泊食分離をイベント的に実施。

各宿泊施設の料理は、地産地消を意識したメニューを強化し、市内の飲食店、漁協との連携により漁師料理を提供。

平戸の宿泊施設・観光施設・食事処・体験施設・ガイド・タクシーなど、共通で利用可能なクーポンを発行。

教会や歴史等の地域資源についても、長期滞在者に対するガイドや体験メニューを提供できるように取組を模索。

夜型観光への対応

熊本県玉名市

10 玉名温泉 【たまなおんせん】

■玉名温泉観光旅館協同組合

TEL.0968-74-2961



仕事が終わってから温泉タイム（フライデーパック）

新幹線開業をにらんで、平成19年度から玉名温泉の強みを生かす取組みを模索。新玉名駅から車で3分という利便性、地域でとれる豊かな農水産物を生かすという視点で商品企画化に取組み、ホームページや県の観光パンフレット等による情報提供を実施。

朝・夕のイベントの開発

山形県鶴岡市

11 あつみ温泉

【あつみおんせん】

■あつみ観光協会 事務局

TEL.0235-43-3547 URL <http://www.atsumi-spa.or.jp>



「おもてなしの気持ちを形に」 -おもてなしによる温泉街のにぎわい創出-

あつみ温泉は湯治場の発達とともに、通説で270年の歴史があると言われていた朝市が路上に並ぶようになった。

あつみ温泉では、「おもてなしの気持ちは形にしないと相手に伝わらない」を合言葉に、おもてなしの表現装置としての花鉢やベンチを多数配置するとともに、散策とセットとなるくつろぎの場を提供する足湯カフェを設置し、賑わい創出を演じてきた。沿道商店でもイーゼル看板や花などの店舗飾り付けなど、前向きな取組を展開。また、通りの一部を通行止めにシタ市を開催するなど、通りを賑わいのためのステージとして活用が図られてきた。

朝・夕のイベントの開発

石川県輪島市

12 本町・朝市通り

【ほんまち・あさいちどおり】

■本町・朝市通り整備推進会議 本町ストリートセイバー

TEL.0768-22-7653 URL <http://www.honmachi.or.jp/>



魅力・賑わい・文化が香り「本物に出会える町」

輪島市はもとより奥能登を代表する観光地の輪島朝市、そして、共に発展してきた本町商店街は、近年の大規模商業施設の進出や観光客需要の低迷などの社会環境の影響を受けてきた。

1000年以上の歴史を持ち、道路関連の法制化以前から特殊な道路活用形態をとりながら、全国的にも珍しい、商店街との共存共栄を図ってきた本町・朝市通りの独特な歴史や文化を生かしながら以前の賑わいを取り戻すために、風情や景観に配慮した電線類の地中化や給排水設備など清潔感溢れる通り整備を実施し、小路を活用しながら周辺道路等とのネットワーク化による回遊性のある楽しく歩けるみちづくりを展開している。

朝・夕のイベントの開発

北海道占冠村

13 占冠村

【しむかっぶむら】

■アルファリゾート・トマム

TEL.0167-58-1111(代) URL <http://www.snowtomamu.jp/>



雲海テラス 見たことのない朝

滞在中の魅力づくりのための企画会議で、 Gondola山頂駅のスタッフが発案。6月中旬から9月までの早朝、Gondolaで山頂に登り、眼下に雲海を眺めながら、コーヒーや軽食を楽しむ。現在では宿泊客の半数が参加する他、日帰り客も増加中の人気メニュー。

朝・夕のイベントの開発

島根県松江市

14 松江

【まつえ】

■松江市観光文化ブランド推進課

TEL.0852-55-5632 URL http://www.city.matsue.shimane.jp/shinjiko_yuuhi/



縁結びの地に映える一期一会の夕日 ～宍道湖の夕日～

宍道湖の夕日は、「日本の夕陽百選」にも選定されている水の都 松江の象徴。

安心して夕日を楽しめるスペースを創出し、宍道湖の夕日をよりPRするため、平成16年度から宍道湖夕日スポットの整備を行い、平成18年度に竣工。宍道湖のシンボル嫁ヶ島、袖師地藏などを望む絶好のロケーションから多くの市民、観光客で賑わっている。

また、宍道湖の夕日を国内、国外にPRするため、松江観光協会では、日本初となる「夕日予報」を気象協会の協力を得てWEBで発信。4ヶ国語対応で行っている。また、携帯サイトでは、外出先からその日の夕日の見える確率が分かるため、観光客に好評。

朝・夕のイベントの開発

新潟県妙高市

15 赤倉温泉

【あかくらおんせん】

■赤倉温泉観光協会

TEL.0255-87-2165 URL <http://www.akakura.gr.jp/>



ちよっぴり早起きして朝めし前の『高原散歩』おいしい空気とお水、朝霧の温泉街を地元の女将がご案内

新潟の食材（米・酒・肴）と当地の高原のイメージをいかにマッチングさせるか。また、他の温泉地との差別化をいかに図るかを検討した結果、朝の高原の空気の中を地元の住民が山野草・歴史・温泉などを紹介しながら散策し、お腹をすかせてもらうのが一番印象的なものではとの考えから、女将の会が中心となり平成19年秋から活動を実施。

16 山田温泉 【やまだおんせん】 TEL.026-245-1100 URL <http://members.stvnet.home.ne.jp/hin-nobe/html/>

■信州高山温泉郷観光協会



山田温泉から山田牧場にかけての紅葉・滝の魅力を満喫していただく取組を旅館同士で協力して実施

山田温泉～七味温泉～山田牧場一帯は標高差があるため、カエデ・ブナ・ナナカマドなど広葉樹が赤や黄色に染まるのを、長期間にわたって楽しむことができる。そこで、10月の1ヶ月間、毎日、山田温泉に宿泊されるお客様を対象に、信州高山温泉郷の松川渓谷の紅葉や滝（雷滝・八滝）の魅力を知っていただく為、早朝シャトルバスの運行に取組んだ。

多様な宿泊施設

三重県紀北町

17 紀北町 【きほくちょう】 TEL.0597-32-1661 URL <http://www.sato.pref.mie.jp/member/info.php?id=44>

■海山物産株式会社



島勝浦体験型イベント交流施設「けいちゅう」

紀北町は、海と山に恵まれた地域資源の豊かな町であり、その資源を活かして体験観光による町づくりを推進している。「島勝浦体験型イベント交流施設」は本町の体験観光を推進するうえで大変重要な拠点といえる。当施設は、平成17年度に内閣府の「地域再生計画」の認定を受け、「元気な地域づくり交付金」を利用し、桂城中学校の廃校舎を改修して体験交流施設として整備を実施。

当施設のある島勝浦地区は、古くから定置網漁を中心とした漁業の盛んな地域であり、また、施設のすぐ近くには、「和具海岸」やヒノキ美林の山がある等、グリーン・ツーリズム、ブルー・ツーリズムを推進するうえで好条件であり、様々な活動を地域住民と一緒に展開していくことにより、交流人口の増加と定住人口の拡大を図り地域活性化に繋げていけるものと考えている。

多様な宿泊施設

和歌山県田辺市

18 秋津野ガルテン 【あきづのがるてん】 TEL.0739-35-1199 URL <http://agarten.jp/>

■農業法人株式会社秋津野



農のある宿舎

上秋津地域の農家が持つ、自然環境・景観・文化など多様な地域資源を有効に活用し、都市住民のグリーン・ツーリズムなど農業体験の拠点、子どもたちの食育の場及び団塊の世代等の田舎暮らしの受入等を目的とした長期滞在型拠点として、交流施設、宿泊施設、農家レストランの整備を行った。

多様な宿泊施設

熊本県菊池市

19 菊池市 【きくちし】 TEL.0968-27-0102 URL <http://suirgen.org/>

■きくちふるさと水源交流館



山中の廃校を宿泊施設化し自然の中での遊びや体験を通じて農山村の豊かさを体験

平成12年に旧菊池市立菊池東中学校が廃校し、地元住民から伝統と歴史のある校舎を残したいという希望があり、また、菊池市としてはグリーンツーリズムの体験施設を検討しており、双方の意見が合致した施設が旧校舎であり「きくち水源交流館」として平成16年に設立。都市に住む人々が農山村に滞在し、自然とのふれあいや地域の方々との交流を楽しむことを目的に、自然の中で農作業や家畜の飼育体験など一年を通じて地域の人、自然、くらしを体験できる。

多様な宿泊施設

北海道増毛町

20 増毛町 【ましけちょう】 TEL.0164-53-1176 URL <http://www10.plala.or.jp/botiboti/>

■ぼちぼちいこか増毛館



『レトロな街並みを観光資源に』レトロストリートの貴重な歴史的資源として、旅の若者が復活させた旧旅館

JR留萌本線の終着駅「ましけ」。駅から市街地に向かう通りには、かつて鯨漁で栄えた時代の建造物が今もみられ、当時の繁栄が窺える。道北では唯一といえる歴史的な街並みを残している。築70年以上の旧駅前旅館を、現在若夫婦が受け継いで、ユースホステルのような形式の旅館としてリニューアルオープンし、歴史ある建物を今も残している。北海道遺産に指定されたメイン通りのほぼ真ん中にあり、独特な窓の形や表正面の入り口周りの形状など、大正レトロ風のノスタルジックな雰囲気を外見からも漂わせている。

21 旧逸見勘兵衛家 【きゅうへんみかんべえけ】 TEL.080-6359-0808 URL <http://www.town.fukui-wakasa.lg.jp/>

■若狭町商工観光課



熊川宿を代表する古民家を宿泊施設として再生

熊川宿は江戸時代の面影を残す町並みに人気があるが、宿泊施設が少なく、通過型の観光地となっている。伊藤忠商事の二代目社長の伊藤竹之助氏の生家である旧逸見勘兵衛家は、平成6年に旧上中町に寄付され、熊川宿を代表する古民家として平成10年から一般公開した。その活用法として、「第二次熊川まちづくりマスタープラン」には5段階の方法が書かれている。①モデルハウス②ゲストハウス③ショップハウス④レストハウス⑤ステイハウス。今は最終段階に入り、平成20年度に改修をし宿泊できるようにした。宿泊拠点をつくることで、熊川宿の魅力をじっくり味わってもらい、観光の活性化を目指す。



MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, filling the majority of the page.